【2章】

（部室）

平山
「お疲れ様です」
部長
「どうした？ 1時間の遅刻だぞ」
蓮
「すみません、部長…兄は方向音痴で……」
部長
「明日は遅れることも考えて早めに移動しろよ」
平山
「すみません……」

～翌々日～
部長（怒り）
「おい、平山はどうした…？」
ひかり
「私たちが教室を出た時にはもういなかったよ？」
部長
「……」

～一週間後～
平山
「おはようございます」
部長(笑顔)
「おそよう、平山タカシ。
……今何時か答えてみろ」
平山
「えー、18時です。」
部長
「そうだな、18時だな？
お前が教室を出たのは何時だ？」

平山
「確か…16時だったと」
部長
「……ここに来るまでに2時間かかったと……？」
平山
「はい！頑張りました！」
部長（真顔）
「……おい、ひかり」
ひかり（緊張）
「はい……」
部長（怒り）
「明日からはお前が平山を連れてこい」
ひかり（驚き）
「え、でも私、放課後は委員会に参加してからこっちに来て」
部長
「いいな」
ひかり（緊張）
「……はい」
部長
「平山はひかりが委員会終わるまで教室で待機していろ」
平山
「……はい」
ひかり、平山
(部長、こわいぃぃ…)

〜次の日〜
部長
「……タカシはどうした？」
ひかり（苦笑）
「えっと…その……私が戻った時には教室にいなくて…」
部長
「……」

〜さらに次の日〜
部長（部長）
「……」
ひかり（焦り）
「えっと、今日も…」

〜別の日〜
ひかり
「すみません…」
部長（怒り）
「……」

〜さらに違う日〜
ひかり
「……」
部長（怒り）
「……」

〜またまたとある日〜
ひかり（泣き）
「よ、ようやく捕まえましたーー!!!!!!」
部長
「でかした！」
ひかり
「うえーん！怖かったよ〜〜
部長怖かったよ〜〜
もう迎えに行くのやだよ〜〜〜」
部長
「それで、何か言うことはあるか？平山タカシ」
平山
「え、何で怒ってるんですか…」
ひかり
「そりゃ怒るよー！タカシくんいつも教室に居ないんだもん！」
平山
「いやいや、俺毎日ちゃんと教室にいましたよ！なのに、誰も迎えに来てくれなくて…」

平山
「いつも夜に蓮が俺を迎えに来るんですよ…しかも帰宅するために……
俺、皆に嫌われてるのかとヒヤヒヤしてたんですから！」
ひかり
「え、でも」
蓮
「はぁ……おおかた、兄さんがお花摘みに行っている間にひかりさんが教室に戻ってきてたんじゃないですか？」
ひかり（驚き）
「お花摘みって…毎日だよ？そんな確率ありえないよ」
蓮
「兄さんはお花を摘みに行く道にも迷うんです。普通の人と同じに考えない方がいいですよ」
ひかり、部長（驚き）
「……」
ユエ
「これは…重症……」
葵
「流石にこう毎日続くと大変だよね～」
部長
「蓮、お前の兄は家でもこうなのか？」
蓮
「いえ、流石に家の中では迷わないですね…」
部長
「そうか……では仕方がない…」
ユエ
「部長…？」
部長
「この方法は使いたくなかったが…」
葵
「何するのー？」
部長
「今日でココに集まるのは辞めにする」
全員（驚き）
「「「へあ？」」」

蓮
「では、どこに集まるんですか？
私たちが兄さんの教室に行くとしても、教室は音出し禁止ですよ？」
部長
「いや、集まること自体やめるんだ」
葵
「じゃあ、どうやって練習するの〜？」
部長
「これからは各自、好きな場所で自主練に励んでもらう。そして、平山タカシ」
部長
「お前はこれから放課後、私たちを探しだせ。ただし、最初に部室に行くことが条件だ。」
ひかり
「なるほど！何回も部室に行くことで、体に覚えさせようってわけだね！」
部長
「その通り！ 私たちを見つけるまでの間、必ず部室に行くことで、お前の体は何も考えずとも自然と部室に行くようになる、という寸法だ！」
ひかり
「名案だよ部長!!」
蓮
「ちょっと待ってください！ あの兄さんですよ？ 絶対無理ですよ！音楽祭はどうするんですか!?」
部長
「タカシが音楽祭までに私たちを見つけることができなかったらそこまでだな…諦めるしかない」
蓮
「そんな……」
部長
「蓮……タカシを信じろ」
蓮
「なんで、なんでそんなこと言うんですか？
部長もこれまで兄さんが来なくてずっとイライラしてたじゃないですか…なのに……なんで信じられるんですか……？」
部長
「タカシはハッキリ言ってバカだろう」
蓮
「はい」

部長
「だが、そういうやつほど追い詰めたら才能を開花させるんだ」
蓮
「確かに、兄さんは今まで無茶だと思う時ほど、ありえないことをしでかして…成功させてきました…」
部長
「そういうことだ。……平山タカシ
私たちの運命はお前が握っている。頼んだぞ」
平山
「え、いや、かなり重いんですけど…」
部長
「頼んだぞ」
平山
「えーと…さすがに無理と言いますか…」
部長
「頼んだぞ」
平山
「ぶちょ」
部長
「頼んだぞ」
平山
「……はい」
部長
「ではそういうことで、解散！」
ユエ、ひかり、蓮、葵
「「「「はい！」」」」
平山
「……えーー……」

こうして、俺らの長い道のりは始まったのだった

（ルール）
東西南北を選択肢して進んでいく。20 秒以内に次の攻略キャラに会えたら成功。失敗したら教室から再びスタート。全員に会うことができたらクリア。
経路図は「経路図.png」を参照

---皆を探しに行こう！---
東
西
北
南

(部室)
葵
「おつかれ〜」
平山
「よし！」
葵
「うんうん、頑張って辿り着いたね〜」
葵
「この調子で皆のことも見つけ出してね〜」
葵
「ではでは、頑張ったやまちんにはご褒美をあげましょ〜」
平山
「ご褒美？」
葵
「ふふふ〜、そ、れ、は〜」
葵
「ハグだよ〜！」
平山
「ハグ…？」
葵
「頑張った子にはお姉さんがよしよししてあげます〜」
平山
「え、ちょっうわっ!!」
(葵ドアップ)
葵
「へへへ〜、よく出来ました！」
平山
「……」

葵
「どう？ご褒美になったかな〜」

---分岐---
平山
「えっと…はい……」
「ちょっとこれは…」
「先輩って天然ですよね」

【えっと…はい……(+3)】
葵
「ふふふ〜、良きかな良きかな〜」
葵
「さあ、頑張って皆を見つけに行ってね〜」

【ちっとこれは…(-3)】
葵
「むむむ、ご褒美にならなかった…？」
平山
「ちょっと、恥ずかしいです」
葵
「恥ずかしい？」
平山
「はい…」
葵
「それは良きかな〜」
平山
「なんで！？」
葵
「え〜？ なんでかな〜？」
平山
「なんか、先輩と喋ると疲れます…」
葵
「むむむ、それは良くない、良くないよ〜！」
葵
「やまちんにはみっちりびっしり、私について語り合わなくては〜!!」

平山
「お、俺他の皆探しにいってきまーす！」

(ダッシュ音)

葵
「む〜！」

【先輩って天然ですよね(０)】
葵
「天然じゃないよ〜！」
平山
「皆から言われません？」
葵
「なんでだろう？　よく言われる〜」
平山
「それは先輩が天然だからですよ」
葵
「天然じゃないも〜ん！しっかりお姉さんしたじゃん〜」
平山
「お姉さん＝ハグですか…」
葵
「弟ってお姉さんにハグされるの好きじゃないの〜？」
平山
「さあ、俺は妹しかいないので」
葵
「それもそっか〜」
平山
「じゃあ、俺皆探しに行かなきゃなので…これで失礼します」
葵
「え〜、もっとお喋りしようよ〜」
平山
「また今度です」
葵
「む〜」

平山
「俺が皆見つけないと音楽祭出れないんだから、我慢してください」
葵
「は〜い…行ってらっしゃ〜い」
平山
「はい、行ってきます」

【中庭(ユエ)】
ユエ
「タカシくん…」
平山
「おおぉ…ユエー！」
ユエ
「ようやく会えたね…」
平山
「ああ、辛い道のりだった…」
ユエ
「ん、よくがんばった」
平山
「ううぅ、ユエ〜!!!」
ユエ
「今日はココでゆっくり休んでいくといい…」
平山
「でもまだ全員見つけてない…」
ユエ
「焦っちゃだめ、時には休息も必要」
平山
「ユエ…」
ユエ
「ん…」
平山
「ところでここはどこなんだ？」
ユエ
「……」

ユエ
「こほん、ここは中庭。一応、部室からは近い位置にある」
ユエ
「多分、他の皆はもっと遠いところで練習してるから、探すのに時間かかるかも…」
平山
「そうか….」
平山
「ユエはわかりやすいところに居てくれたってことでいいのか？」
ユエ
「そうなる…」
平山
「そうか……ユエ…」
--分岐？--
なんていい子なんだ！
面倒くさかったんだな？

【なんていい子なんだ！(+3)】
平山
「なんていい子なんだ！」
平山
「優しい！優しすぎるぞ！俺が見つけやすいように近くの場所で練習してくれていたなんて！！」
ユエ
「ごめん、そこまで考えてなかった….」
平山
「んえ？」
ユエ
「結果的にわかりやすい場所にいた事になるけど、ここは私がいつも練習に使ってる場所だから……」
平山
「そ、そうか…」
ユエ
「うん…」
平山
「まあ、見つかったんだから問題ない！」

平山
「でもそうか、皆が練習で使いそうな場所を探していけばいいんだな！」
ユエ
「そうだけど、タカシくん、ココが中庭だって分かってなかったよね…？」
平山
「……」
ユエ
「多分、たかしくんは何も考えずに直感で行ったほうがたどり着けそう」
平山
「確かに、ここに来るまでは直感で歩いてたな…」
ユエ、たかし
「……」
たかし
「ご、ごほん！」
たかし
「そ、そういえば、ずっと気になってたんだが、ユエはなんで軽音楽部に入ったんだ？」
たかし
「俺はひかりが連れて来てくれたからだけど、皆がどうして入ったのか聞いてなかったなと思ってな！」
平山
「俺の勝手なイメージだけど、ユエは声楽部とかそっち系に入りそうな奴だと思ってた」
ユエ
「中等部までは、声楽部に入ってた」
平山
「おお、俺大正解じゃん」
ユエ
「高等部に入ってもそのまま声楽部に入ろうとしてたんだけど……」
ユエ
「とある学院の…誰かさんが演出してたステージを見て、心を動かされたから……」
ユエ(笑顔)
「もしお互いにこの道を進んだら、いつか一緒にステージを作って行けるんじゃないかって……期待しちゃった……」

---分岐---
もしかして、俺の事か…？
そんなすげぇ奴がいるんだなぁ

【もしかして、俺の事か…？(+3)】
平山
(もしかして、おれのことか…？ それなら自己紹介の時にこっち見てたのも説明つくし、俺の事知ってるっぽかったし……これで勘違いだったら恥ずかしいが……)
平山
「もしかして、俺の事か…？」
ユエ
「ん…」
平山
「そうか……勘違い野郎にならなくて良かった……」
ユエ
「タカシくんの演出は最高だった…
いつか必ず、芸能デビューしたらタカシくんに演出してもらうんだって思いながら過ごしてきた」
平山
「なんか、そういって貰えると嬉しいな……ははっ、俺がここに転校してきたのも必然だったのかも」
ユエ
「ふえっ!!?」
平山
「俺の事をこんなに思ってくれてるやつと一緒に共演出来るのんてさ、何か運命的じゃねぇか？」
ユエ(照れ)
「運命…」
平山
「ん？ 」
ユエ
「ううん、なんでもない」
ユエ
「タカシくん、皆のこと探してたみたいだけど、もう全員に会ったの？」
平山
「いや、まだ会えてないな」
ユエ
「早く探さないと、時間足りなくなっちゃうよ」

平山
「それもそうだな」
平山
「悪かったな、練習中に」
ユエ
「ううん、お話できて嬉しかった……また２人で会ってくれるとうれしい…」
平山
「ああ、勿論だ！」
平山
「じゃ、またな」
ユエ
「ん…」
(足音)

【そんなすげぇ奴がいるんだなぁ(0)】
平山
「へー、そんなすげぇやつがいるんだなぁ…」
ユエ
「……その人、タカシくんだよ……」
平山
「え、うそ」
ユエ
「察して…」
平山
「え、まじ、え、ちょ……ま？」
ユエ
「ま」
平山
「え〜、いや、何か、照れるな…」
ユエ
「照れてるタカシくん、可愛い…」
平山
「見んな……」
ユエ
「くふふ」

平山
「くそ…もう何か恥ずいから帰る！」
ユエ
「帰さない、もっと見てたい」
平山
「うるさい、俺は帰るんだー！！」
(ダッシュ音)
ユエ
「む…逃げられた……」

【音楽室(妹)】
平山
「誰かいるかな？」
蓮
「……兄さん？」
蓮
「まさか、兄さんがここまでたどり着けるとは思いませんでした…」
平山
「蓮！ ふふふ、いやなに、俺もやれば出来るということさ！」
蓮
「今私がいることに思いっきり驚いていましたよね…」
蓮
「まあ、程々にしておいてくださいよ。
道に迷って森にでも遭難したらどうするんですか…」
蓮
「兄さんが迷う度に迎えに行くのは私なんですからね」
平山
「そう言えば、お前は毎回俺が遭難する度
涙目になりながら駆けつけてくれるよなぁ〜」
平山
「なんでいつも俺の居場所分かるんだろうなぁ……？」
蓮
「そんなことより」

蓮
「今日はせっかく兄さんが私を見つけることができた日ですし、お夕飯は豪華にしましょう」
平山
「お！やった！」
蓮
「何が食べたいですか？」
平山
「すき焼き！」
蓮
「すき焼きですか…では、帰りにスーパーによって帰りましょう」
平山
「おう！」
平山
「へへ…この調子で方向音痴が治れば、蓮の送り迎えしてもらう必要も無くなりそうだな！」
蓮
「そ、それとこれとは話が別です!
兄さんには私が必要なんですからね!!」

---分岐---
いや、1人で大丈夫だから
ああ、俺にはお前が必要だ
まさか、お前俺のこと……

【いや、1人で大丈夫だから(-3)】
平山
「いや、1人で大丈夫だから」
蓮
「ふぐっ！」
蓮
「……に、兄さんの」
蓮
「兄さんのバカーーーーー！！！！」

(足音)

平山
「……っ!!
れ、蓮にバカって言われた……」
平山
「はぁ、別の場所に行ってみるか」

【ああ、俺にはお前が必要だ(+3)】
平山
「ああ、俺にはお前が必要だ」
蓮
「に、兄さん……」
蓮
「ふふふ、そうですよ。私がずっと兄さんを支えてあげますからね」
平山
「ああ、よろしく頼むよ」
蓮
「ふふふ、今は気分がいいので、ピアノも上手に弾けそうです」
平山
「そういえば、練習中に悪かったな。
俺もそろそろお暇するよ」
蓮
「そうですか？ 寂しいですね…」
平山
「練習頑張れよ」
蓮
「ありがとうございます、兄さん」
平山
「またな」

(扉開く音)

【まさか、お前おれのこと……(0)】
平山
「まさか、お前俺のこと……」
蓮
「なななにを言ってるんですか兄さん!!!!?」

平山
「その反応、やっぱり……」
蓮
「に、にいさ」
平山
「俺のことペットみたいに思ってるな!!!」
蓮
「……」
蓮
「いえ、分かっていましたよ。昔から兄さんは他人の好意に鈍感でしたからね。落ち込んでなんかいませんよ」
平山
「……？」
蓮
「なんでもありません」
蓮
「兄さんのことは尊敬していますし、ペットだと思ったことなんてありませんから安心してください」
平山
「そ、そうか…何で怒ってるのか分からんが、とりあえずすまん」
蓮
「謝るならちゃんと理解してから謝ってくださいね」
平山
「すみません……」
蓮
「はあ、まあ、いいですけどね別に
それを含めて私の兄さんなんですから」
蓮
「ほら、他の人も探しにいくなら早く行かないと、昼休み終わっちゃいますよ」
平山
「それもそうだな。長居して悪かったな」
蓮
「兄さんならいつでも大歓迎です。また来てくださいね」
平山
「ああ」
(扉開く音)

---蓮ルート終了---

---廊下---
先生
「平山じゃないか」
平山
「先生！」
先生
「お前方向音痴なのに１人で移動して大丈夫か？」
平山
「俺が方向音痴って皆が知ってるところなんですね……」
先生
「はっはっは！ お前の妹が事前に教職員に伝えていたからな！
方向音痴のせいで迷惑かもしれないがよろしくって言ってたよ」
平山
「ははは……」
平山
「今方向音痴治すための特訓中です」
先生
「お！そうかそうか、じゃあ、これ頼むわ」
(大量の書類を渡す音)
平山
「……先生、これは……？」
先生
「書類だ」
平山
「見れば分かります」
先生
「それ、生徒会室に運んでくれや」
平山
「何で俺なんすか…」
先生
「俺の前にいたのがお前だったからだ」
平山
「そんな、理不尽だーー！！！」
(ダッシュ音)

先生
「よろしくな〜〜」
平山
「くっ、逃げ足の速い先生だ」
平山
「てか先生が廊下走るなよ」
平山
「はあ……いくか……」
(足音)

---生徒会室---
平山
「失礼しまーす」
部長
「む、タカシか」
平山
「うす、書類持ってきました」
部長
「ああ、ありがとう。そこに置いといてくれ」
平山
「了解です」
平山
「…….生徒会室、先輩1人なんですね」
部長
「ああ、他の役員は出払っててな」
平山
「そうなんですか」
部長
「ところで、何でお前が書類を持ってきているんだ？」
平山
「先生に捕まったんですよ……」
部長
「ああ、木村先生か」
平山
「あの先生、なんて言うか、個性的ですよね」

部長
「まあ…そうだな……」
平山
「……」
部長
「……」
平山
「じゃあ、俺はこれで…」
部長
「ま、まて！」
平山
「うお！」
部長
「ごほん、その、何だ…ちょうど今から休憩しようと思っててな……
ちょいどいいから、ちょっと話し相手になってくれないか？」
平山
「まあ、俺でよければ…」
部長
「う、うむ」
部長
「……お茶、入れてくる」
平山
「あ、俺入れますよ？」
部長
「気にするな、これも気分転換のひとつだ」
平山
「なるほど…」
平山
「では、お言葉に甘えます」
(時計の音)
平山
(なんか、緊張するな…)
部長
「……待たせたな」
平山
「あ、ありがとうございます」

部長
「茶菓子にクッキーも用意したからぜひ食べてくれ」
平山
「いただきます」
部長
「うむ」

(咀嚼音)

平山
「これ…美味しいですね……」
部長
「そ、そうか！」
平山
「これ、どこで買っ」
部長
「これは自信作でな！デコレーションにも力を入れてみたんだ！！プレーンの生地とココア生地を合わせてリスの形にしたり、コレなんか、いちごのソースを混ぜてみたりした……ん……」
部長(驚き)
「……っ!!!!!!」
部長(照れ)
「わ、忘れてくれ!!!」

---分岐---
「無理です」
「分かりました」
「なんでですか？」

【無理です(+3)】
平山
「無理です」
部長
「なっ……くそっ、何が望みだ…？」
平山
「え……あっ！いやいや、そういうのじゃなくて！」

部長
「折角先輩の可愛らしい一面を見れたのに勿体ないじゃないですかっ！」
部長(照れ)
「……んなっ!!!」
部長(照れ)
「だだだだ黙れ！この首へし折ってやるっ!!」
平山
「あ、そうだ！今度蓮と３人でお茶会しませんか？妹もお菓子作るの好きなんですよー」
部長
「人の話を聞けーーー!!!!」
平山
「嫌ですか……？」
部長
「へぁ、べ、別に嫌と言うわけでは……」
平山
「じゃあ決まりですね！」
部長
「はっ！ おい、私は一言も良いとは言ってないぞ！！」
平山
「えー、何でそんなに嫌がるんですか？
こんなにいいもの作るのに…そのレシピ、自慢しなきゃ損ですよ。我が家にも伝授して欲しいです」
部長
「貴様、それが目的だな！」
平山
「だって俺、こんなに美味しいの初めて食べましたし。もっと食べたいです」
部長
「わっ…分かった！作る！作るから！！だから他の奴らにバラすのは辞めてくれ!!!」
平山
「マジですか！ 約束ですよ！」
部長
「あ、ああ…」
平山
「はは、俺、今めっちゃ嬉しいです。書類運んできて良かった〜」
部長
「そんなに喜ぶことか…？」

平山
「それくらい部長が作ったクッキーは美味しいってことなんですよ」
部長(照れ)
「……」
平山
「じゃあ、また書類運びに参上しますね〜」
(足音)
部長
「あっ、おい！」
部長(照れ)
「……何なんだ、、あいつは…」

【分かりました(−3)】
平山
「分かりました」
部長
「へ、あ、ああ、分かってくれたか」
平山
「はい。俺、忘れるの得意なんで、任せてください」
部長
「……それもそれで、何かムカつくな」
平山
「ん？」
部長
「いや、忘れてくれるならいい。絶対！誰にも！公言するなよ？」
平山
「先輩の嫌がることはしませんよ」
部長
「ふん、ならいい」
部長
「む？もうこんな時間か」
部長
「急がないと次の授業に遅刻するんじゃないか？」
平山
「うわ、マジだ！！すみません、俺これで失礼します！」

部長
「ああ、また放課後にな」

(足音)

【なんでですか？(0)】
平山
「え、何でですか？」
部長
「え、いや、だって……この私だぞ？
お菓子作りなんて似合わないだろ……」
平山
「そんなことないですよ」
平山
「俺、まだ先輩と会って日が浅いですけど、それでも先輩がかなり乙女なのは分かりますから」
平山
「むしろ、お菓子作りが好きそうって思ってたので違和感ゼロですね」
部長(照れ)
「にゃっ、にゃにを言う!!!!!!」
部長(照れ)
「……っ!!!」
平山
「ははっ、きっと先輩とずっと一緒にいた皆なら余計に思ってるんじゃないですかね？ 先輩のことを可愛いって」
部長
「っ！こ、この……」
部長
「オンナったらしがーーー！！！！」
平山
「ええー……」
部長
「もういい！分かった！お前は極度のオンナったらしだ！私の半径 10m以内に近づくんじゃない!!!」
平山
「いやいや、そんな無茶な」

部長(真顔)
「無茶もクソもない。やるんだ」
平山
「いいいイエスマム!!!
失礼します!!!」

(足音)

【屋上(ひかり)】
ひかり
「あっ！タカシくん」
平山
「ひかり！ようやく見つけた〜！」
ひかり
「えへへ〜見つかっちゃった」
ひかり
「皆のことはもう見つけたのかな？」
平山
「ああ、これで全員コンプリートだ！」
ひかり
「そっかぁ！やったねタカシくん!!」
平山
「ああ、長い間待たせてごめんな」
ひかり
「ううん、待ったなんて思ってないよ」
ひかり
「私も練習してたし、今までにないくらい上達してるよ！」
平山
「ひかり…」

---分岐---
気を使ってくれてありがとう
でもあと２週間しかない

【気を使ってくれてありがとう(+3)】

平山
「気を使ってくれてありがとう」
ひかり(怒り)
「……気を使ってるってどういう意味かな？かな？」
平山
「え、いや、だって誰が見たって俺が皆に迷惑をかけたのに……」
平山
「俺が気に病まないようにって思ってああいう発言したんじゃ…ないのか……？」
ひかり
「タカシくんはお馬鹿さんだね！」
平山
「おばっ…!?」
ひかり
「部員の不得意分野を補うのは当たり前だし、私も皆に補ってもらってる。それをいちいち気にしてたらキリがないよ」
平山
「でも…」
ひかり
「それに、元々タカシくんが来る前から、1度解散すべきじゃないかって皆で話し合ってもいたんだ」
ひかり
「音楽祭で優勝するためには皆がそれぞれ壁を破らなきゃいけなかった。その壁が何かなのかは分からないけど……
皆感じてはいたんだ。何かが足りないって」
ひかり
「タカシくんが私たちを見つける前に自分の壁を破ることが今回の私達のミッションだったんだよ」
ひかり
「ということだから、タカシくんが気に病む必要はありません！
むしろ、タカシくんのおかげで私達は1歩前進したんだよー！」
平山
「ひかり……」
ひかり
「まあ、これで明日部室に来るまでに迷ったら鉄拳ものだけどねー」
平山
「は、ははは、大丈夫だよ……多分…」

ひかり（怒り）
「多分ってなにかな？かな？」
平山
「大丈夫です！はい！」
蓮
「何が大丈夫なんですか？」
平山
「蓮！」
ひかり
「蓮ちゃん！どうしたの？」
蓮
「もう帰宅時間なので、兄を迎えに来ました」
平山
「いつも悪いな」
蓮
「いえ」
蓮
「これで全員見つかったので、明日からまた部室で練習することになります。
大丈夫ですね、兄さん、ひかり先輩」
平山
「ああ」
ひかり
「ばっちこいだよ！」
蓮
「それでは、私達はこれで失礼しましょう」
平山
「また明日な、ひかり」
ひかり
「うん！また明日」

【でもあと２週間しかない(-3)】
平山
「でも、あと２週間しかない…」
ひかり
「あと２週間もあるんだよ！」

ひかり
「ユエも蓮ちゃんも、部長も葵さんも、タカシくんだって、皆優秀なんだから２週間あれば十分」
ひかり
「タカシくん、私たちがのほほんと練習してただけだと思ってる？」
平山
「違うのか？」
ひかり
「私たちもそれぞれ部長に与えられた課題をこなしてたんだ」
ひかり
「壁を破って成長した今の私たちに恐れるものは何もないのだよ！」
平山
「ははは、頼もしいな！」
ひかり
「あと２週間！ラストスパートだよ、タカシくん！」
平山
「ああ！頑張ろうな！」
蓮
「そうですね、頑張りましょう」
平山
「蓮！」
ひかり
「蓮ちゃん！」
蓮
「帰宅時間なので、迎えに来ました」
ひかり
「もうそんな時間か」
平山
「いつも悪いな」
蓮
「いえ」
蓮
「これで全員見つかったので、明日からまた部室で練習することになります。
大丈夫ですね、兄さん、ひかり先輩」
平山
「ああ」

ひかり
「ばっちこいだよ！」
蓮
「それでは、私達はこれで失礼しましょう」
平山
「また明日な、ひかり」
ひかり
「うん！また明日」

(ゲームクリア！)

(翌日、部室)
部長
「皆揃ったな」
部長
「では、これより本格的に音楽祭に向けて取り組んでいくぞ！音楽祭まで残り 2 週間、死ぬ気で励め!!!!」
全員
「はい！」
部長
「時間も限られてるし、早速練習に入る」
葵
「今回演奏する曲は〜、「kagayake!!GIRLS」だよ〜〜」

（BGM：kagayake!!GIRLS）

部長
「さあ！全力を尽くすがよい！」
全員
「おお〜！」

～音ゲー開始～
【s,a】
ひかり
「おお！初めて合わせたのに、結構まとまってたね！」
ユエ
「ん…いい感じ」
部長
「うむ、でもまだまだ詰めるところはありそうだな」
蓮
「ええ、でもこの調子なら音楽祭に間に合いそうですね」
葵
「盛り上がっていこ～！」

【b,c,d】
部長
「まあ、最初ならこんなもんだろう」
ひかり
「うん、もうちょっとタイミングあわせないとね」
ユエ
「あと少し、切り詰めていこう…」
蓮
「はい」
葵
「楽しんでこーぜ！なの～」

こうして俺たちは音楽祭までの残りの日数全てを、朝も夜も関係なく練習に費やした。全ては、優勝を勝ち取るために

【2 回目以降の会話】
葵
「お疲れ〜。今日も張り切ってこ〜！」

ユエ
「ん……がんば…」

蓮
「また来たんですか？　早く皆さんのこと見つけてください」

部長
「あと一息だ。頑張れよ」